

プロセーラー

白石康次郎

SHIRAIISHI Kojiro

たった一人でヨットに乗り、どこにも立ち寄らずに南半球を一周する——。本年二月、「最も過酷」とされるヨットレース「ヴァンデ・グローブ（注1）」で完走を果たした白石康次郎さん。アジアのセーラーで初の快挙だった。地球を相手に「生き死に」まで懸けて戦うレースの魅力はどこにあるか。ごく普通のサラリーマン家庭で育った少年時代や、世界一周の夢へ踏み出した修業時代の話とともに語っていただいた。





取材・文 小堂敏郎
写真 野瀬勝一

大海原の風を越えろ

世界一周しても、
僕は何も変わってない

——世界一過酷とされ、欧州

では非常に注目度の高いヨットレース「ヴァンデ・グローブ」で、アジア勢ただ一人の出場者として、初の完走という歴史的快挙を成し遂げられました。そんな白石さんは、どのような家庭で、どんな少年時代を過ごされたのでしょうか。

白石 僕はごく普通のサラリーマン家庭で育ちました。ヨット

とはまったく無縁でした。

どんな少年だったかという
と、このままです（笑）。「ヴァンデ・グローブで完走してどう変わりましたか」ってよく聞かれますが、子どもの頃から今に至るまで本質的に何も変わっていません。小学生の頃は、「この指とまれ」と言っていて遊んだり、プラモデルをつくったりすることが大好きでした。戦艦大和

や連合艦隊をつくり、完成したら、爆竹で爆破し、またつくる。今五四歳ですが、やっていることは小学生の頃と同じです。「この指とまれ」で、みんなが集まって、ヨットというでっかいプラ

モデルをつくって、世界一周し、また次のレースの挑戦に向けた準備をします。

——お母様を早くに亡くされ、お父様に厳しく育てられたと、ご著書に書いておられます。

白石 父は非常に厳しい人でしたが、あれしろこれしろと言

われたことはただの一度もありません。いつも言われていたのはただ一つ、「お前が決める。決めたらそれに責任を持って」と。

（注1）ヴァンデ・グローブ

単独でヨットに乗り、無寄港・無補給で南半球の四万キロメートル余りを一周する長距離外洋帆走レース。四年に一度、フランス西部の港町（ヴァンデ県レ・サール・ドロンヌ）をスタート／フィニッシュ地として開催される。レースにかかる所要期間は約三カ月。「世界一過酷なレース」と言われ、完走率は五〇％程度。

そのおかげで僕は自分の人生を自分の責任において歩むことができた。そこは親父に感謝です。

僕は母親を小学校一年のときに交通事故で亡くしてしまします。母親のありがたみは体験できませんが、母がいないから自分のことを自分でやるすべからに付きました。いなかっただけで、すべてを一人で決めてやりこなすという素地ができた。ヨットレースは、海の上で全てのことを自分でしなければなりません。それが自然とできました。どんな境遇も、生きる上で何一つ無駄にはならないですね。

—— 日本では、ヨットという競技自体が、欧州に比べ盛んではありません。

白石 フランスではヨットはいわば国技。世界最高峰の自転車レース「ツール・ド・フランス」、テニスの「全仏オープン」と並び注目を集めるのが「ヴァンデ・グロブ」です。ヨット乗りをセーラーと言いますが、

欧州でセーラーというと、日本の「サムライ」に近い意味合いを含む言葉です。

欧州の人からは「四方を海に囲まれているのに、なぜ日本はヨットの人気がないのか」とよく聞かれます。歴史的にみると、西洋諸国では中世時代に海上の覇権を争っていましたが、日本ではそのとき鎖国をしていました。そして、黒船が開国を迫った頃には、西洋ではもう帆船から蒸気船の時代へと移っていたんです。また立地面からみても、日本の沿岸は暗礁、岩礁が多いし、台風の通り道にもなっているなど、ヨットには不利な状況です。そうした歴史的・地理的な事情が重なって、日本ではヨットが盛んではない。石原裕次郎さんや加山雄三さんの映画のイメージが今も強いんじゃないですか。

—— 「ヨットはお金がかかる」というイメージも強いんです。

白石 ヴァンデ・グロブに出るためにレース艇建設を含め総額で約二〇億円かかりまし



荒れる海の中で船を走らせる

(写真提供：DMG MORI SAILING TEAM)



しらいし・こうじろう ● 1967年東京都生まれ。神奈川県立三崎水産高等学校（現・神奈川県立海洋科学高等学校）専攻科（機関）卒業。86年多田雄幸氏に弟子入り。93年、当時26歳でヨットによる単独・無寄港・無補給世界一周の史上最年少記録を樹立。2006年10月単独世界一周ヨットレース「ファイブ・オーシャンズ クラスI」に日本人として初参戦し、07年5月に歴史的快挙となる2位でゴール。16年11月には「第8回ヴァンデ・グローブ」にアジア人として初出場（マストトラブルによりリタイア）。18年10月DMG森精機が立ち上げた日本初の外洋ヨットチーム「DMG MORI SAILING TEAM」のスキッパーに就任。20年11月「第9回ヴァンデ・グローブ」に再挑戦し、21年2月アジア勢として初の完走を果たした。記録は94日21時間32分56秒、33艇中16位に入った。プロセラーとしての活動以外にも、子どもたちと海や森で自然を学習する体験プログラムなどに携わる。主な著書に『七つの海を越えて』（文藝春秋）、『人生で大切なことは海の上で学んだ』（大和書房）、『精神筋力』（生産性出版）などがある。

た。僕がスポンサーを募り、お金を投資してもらったんです。——スポンサーは通常、選手の競技服や道具などに企業や商品名を入れることによる広告効果を期待し、お金を出します。ヨットの世界も同じでしょうか。

白石 通常、企業はモノを安く作り高く売ってもらうけます。これはビジネスです。でも僕はお金を出してもらった二〇億円を二五億円にしてお返しするこ

とはできません。だって、ヨットで世界一周をして、優勝したとしても企業の商品は一つも売れませんからね。スポンサーに出す僕の企画書に、もうけ話は一切書いてないんですよ。じゃあ、僕は何を売っているのかというと、「物語」です。ヴァンデ・グローブという命懸けのレースに、人生を懸けてチャレンジする。そこに感動し、共感してもらえるかどうかです。

今回、工作機械メーカーがセーリングチームを立ち上げてくれましたが、ヨットをつくっている会社ではありません。チームにかけてくれた何億円というお金をマスコミの広告に費やせば、リスクなく大々的に自社のPRはできるでしょう。

失敗が頭をかすめたら、達成はできない

——県立三崎水産高校を卒業後、著名なセーラーの多田雄幸さん（注②）に弟子入りされました。

白石 いつか世界一周したいと思っ、水産高校で船の機関士になる勉強をしていたとき、たまたま多田雄幸という人ーのちの僕の師匠ーの著書を読んだんです。個人タクシーのおじさんが、手作りのヨットで世界一周レースに出場しちゃう。しかも優勝。「俺も多田さんのようにヨットで世界一周したい」と、東京駅の公衆電話の電話帳で多田さんを探し出していきなり電話しました。多田さん

でもそこからは心揺さぶるような感動は生まれません。僕がやっていることは、スポンサー企業から見たら超ハイリスク・ノーリターン。でもそこにある物語にお金を投じ、感動を作り出すための資金的なサポートをしていただいているのです。

も「じゃあ今から来いよ」って。それで自宅に押しかけました。——水産高校と多田さんから、何を学ばれましたか。

白石 水産高校ではエンジニアのトレーニングを徹底的に（注②）多田雄幸
一九三〇年、新潟県長岡市生まれ。個人タクシーの運転手をしながら三八歳でヨットを始め、八二年第一回アラウンドアロウン（BOCチャレンジャー：単独世界一周レース）に唯一の日本人としてエントリーし、クラスⅡ（五〇フィート艇）で優勝した。著書に、白石さんが感銘を受けた『オケラ五世優勝す』（文藝春秋）がある。九一年、六〇歳で逝去。

受けました。何か船に異常が発生したら、原因をひたすら追求です。ヨットセーラーは基本的にはエンジニアなのですが、その基本は水産高校で仕込まれました。

一方で、僕の師匠である多田雄幸の姿勢はその対極にありました。何もないキャンパスに絵が描ける人で、発想力、イメージする力がすごい。仲の良い和尚が貸してくれたお寺の敷地内で、手製で世界一周レース用のヨットをつくったんですよ。そのヨットの幅は四・二メートルと中途半端な長さでしたが、お寺の出口の幅でサイズを決めたそうです。そのヨットで世界一周レースに出て、優勝した。常識的には考えられないことです。多田さんは、アーティストであり、天才だった。

水産高校でエンジニアの基礎を、師匠の多田さんからは不可能を可能にするバイタリティーとイメージすることの大切さを学んだ。どちらもヨット

トレースでは必要不可欠な力。僕のヨット人生の宝です。

——ヨットレースの一番の魅力は何でしょうか。

白石 ヨットは、お金をかけていくから良い艇を作っても風が吹かなければまったく動きません。人間の知恵と科学技術を尽くしても、自然の恵みがないと役に立たない。ですがひとつは自然の恵みを受ければ、風より速く走ります。「アメリカズカップ」というマツチレースのヨットは風の三倍の速さで走る。風を追い越していくわけです。ヨットは人間の知恵と自然との調和でできているんですよ。だから、美しい。

ひとたびレースがスタートしたら、たった独りで、でっかい地球を相手にするわけです。人間の技術に頼ってばかりでも、自然に任せるだけでも駄目。地球を丸ごと相手にするスポーツとして、ヴァンデ・グロープは最高の舞台じゃないかと思っています。

——これまでにリタイアされ

たレースもありました。「失敗」について、どう捉えていますか。

白石 率直に今でも悔しいです。どのレースも、真剣に、全力でやった。誰にでも失敗はあるなどというそんな生半可な気持ちでやったら、ヨットでの無寄港・無補給の世界一周なんてとても達成できません。どの挑戦も同じだけ頑張ったけれど、結果は違いました。厳しい現実ですが、それが自然を相手にする競技の奥深さだと思います。

環境スポーツとしてのヨットに風が吹く

——十年以上前から居合の修行を続けているとお聞きしました。肉体の力は若い頃に比べ落ちても、精神の鍛錬があったから過酷なレースを五〇代で完走できた、ということはありませんか。

白石 あります。今僕は少林寺二段、居合は五段。特に居合は二段以上になると、真剣で修行をするので、「生き死に」

二回続けてリタイアしたとき、サポートしてくれていた造船所の親方から「船のお尻を叩きながら走っているようだ」と言われて、それではいけないと、船によく話しかけるようになりました。そうした船への愛情とは別に、命を懸けたレースをしているせいか、僕は、船に神が宿っていると思っています。ヨットへの敬意とともに、そこに神を宿すことが大切だと僕は思っています。

の勉強になるんです。ヨットレース中、海の上では予想もつかないことが次々に襲ってきますし、精神力や一瞬の判断が試される。板子一枚下は死の世界ですよ。落水して命を落とす選手もいます。勝ち負けの前にも「生き死に」を懸けた戦いでもあるんです。

ヴァンデ・グロープの出港のとき、僕は袴姿で帯刀し、居合



フランスで行った居合トレーニング

(写真提供：DMG MORI SAILING TEAM)

の格好をして出たんです。みんな大喜びでした。これも僕のストーリーになるんです。他国のどんな選手でも、この僕のストーリーは真似できない。ヴァンデ・グローブで唯一の東洋人

であり、日本人である僕の振る舞いが注目される。フランス人にとっては、僕はファーストサムライですから。康次郎は何を考え、どんな行動を取るのか。そのストーリーに

欧州の人は注目し、応援してくれるんですよ。

僕自身、海外のレースに日本人として挑戦してきて感じるのは、日本は世界でも特異な存在だということです。日本にしかない文化や日本では使われない言語、そして円というお金。それで先進国なんです。新渡戸稲造が「世界に咲いた一輪の桜」と表現しました。すばらしい表現で、これぞ日本のストーリーじゃないですか。コロナ前には海外の観光客がたくさん来日していました。海外の人は、そのストーリーに価値を見いだしているのだと思います。

——日本においても、ヨットの存在感を高めたいですね。

白石 もっともつとヨットを広めたいという思いはありますね。今、風が吹き始めているなど感じているんです。世の中ではSDGsや脱炭素がキーワードになっていますよね。ヨットは、排気ガスを一切出さない究極の自然エネルギー

ギースポーツです。僕は今回のヴァンデ・グローブで、各地の海水をサンプリングしてきました。海洋環境において大きな問題になっているマイクロプラスチックを六個、サンプルとしてJAMSTEC（海洋研究開発機構）に提供したんです。世界一周レースで出会った数々の美しい海を、ずっとそのまま残したいですし、そのためにもヨットが環境にやさしいスポーツとして発展するとうれしい。

ヴァンデ・グローブをやっている最中、自分が何者であるか、今の自分でいいのか自分から問いました。「俺はこれでいい」と心から思えた。好きなこととことん追い続ける、僕みたいな大人がいてもいい。僕が師匠の多田さんに憧れたように、僕の後には続く人がきつと出てくるでしょう。それを僕は楽しみにしています。

——本日は、貴重なお話、ありがとうございました。

（聞き手／情報サービス局長 渡邊昌二）